

# フロイトの方法

——観察と思弁のあいだで——

中 村 靖 子

## はじめに

ヨーゼフ・ブロイアーとの共著『ヒステリー研究』*Studien über Hysterie* (1895) 以後、フロイトは、『夢の解釈』*Traumdeutung* (1900) や『トーテムとタブー』*Totem und Tabu* (1913)、「欲動と欲動運命」*Triebe und Triebchicksale* (1915) など、精神分析学の道標となるさまざまな仕事を経て、1920年、『快原理の彼岸』*Jenseits des Lustprinzips* を発表する。この書によってフロイトのメタ心理学<sup>1</sup>は頂点を迎えた。ここでフロイトが概念化した〈死の欲動〉理論は、ラディカルなまでに「反社会的な発想」だった [Dufresne: 4]。

創立以後、精神分析が辿った歴史を追うならば、実践面と思想面とを別途考慮することになる。実践面においては、学派間の争いを経て、メラニー・クラインやラカンなどにより一時活性化したが<sup>2</sup>、その後は影響力を失っていった。しかしまた、既に精神分析が世に問われた当初より、精神分析に対する懐疑や反抗、批判は強かった。トッド・デュフレーヌ Todd Dufresne によれば、精神分析の創始者フロイトが亡くなるずっと以前から「精神分析の死」を宣言する批評家は多かった。「精神分析にはつねにどこか取り込み詐欺めいた、あるいは科学のなり損ない、またはフロイト自身の肛門性格 (anality) が昇華した賜物といった感じがある」というのである [Dufresne: 24]。

フロイトは、神経病理学の私講師としてキャリアを出発させたが、アンリ・エレンベルガーは「無意識の発見」を鍵語としてフロイトの精神分析を精神医学の系譜のなかで位置づけ (*Die Entdeckung des Unbewußten* (1970))、レオン・シェルトークとレイモン・ド・ソシュールの『精神分析学の誕生』*Naissance du psychanalyste—de Mesmer à Freud* (1973) は主に催眠術

1 フロイトは1914年から15年にかけて『メタ心理学の準備のために』*Zur Vorbereitung einer Metapsychologie* と題する論集の出版を構想していた。これは実現しなかったが、収録されるはずだった論考のうち、個別に発表されたのは、「欲動と欲動運命」、「抑圧」*Die Verdrängung* (1915)、「無意識」*Das Unbewußte* (1915)、「夢理論へのメタ心理学的補遺」*Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre* (1917)、「喪とメランコリー」*Trauer und Melancholie* (1917) の5篇である。ジョーンズによれば、「メタ心理学」という名称でもってフロイトは、「精神作用のダイナミックな属性 its dynamic attributes、精神作用のトポグラフィックな特質 its topographical features、精神作用のエコノミーの意義 its economic significance の説明を含むべき、包括的な記述」を考えていた [Jones: 434/343]。

2 フロイト後の精神分析の流れについては [立木 (2012)] のとりわけ「序」を参照。

と転移の思想史的系譜のなかでこれを位置づけた<sup>3</sup>。ウィーン大学の学生時代フロイトは生理学者エルンスト・ブリュッケに学んだが、フランク・サロウェイは生物学者としてのフロイトという観点からフロイトの思想を捉え直そうと試み (*Freud, Biologist of the Mind. Beyond the psychoanalytic Legend* (1979))、フロイトにおけるダーウィンとカントの影響のせめぎ合いという観点からファランワイダーはフロイトの思想を一九世紀の生理学研究のなかで捉えた (*Dawin Faces Kant—A Study in Nineteenth-Century Physiology* (1991))。

神経科学の分野では1950年代以降、フロイトの神経学的工作を再評価する動きが起こり、これを継承してヴァレリー・D・グリーンバーグは『フロイトの失語症論——言語、そして精神分析の起源』*Freud and His Aphasia Book, Language and the Sources of Psychoanalysis* (1997) を出版したが、これはフロイトの失語研究を、のちの精神分析理論を見据えつつ、それ以前の神経科学や心理学の中で位置づけた点で画期的といえる<sup>4</sup>。

フロイトのユダヤ性をめぐってはマルト・ロベールの『エディプスからモーゼへ——フロイトのユダヤ人意識』*D'Edipe a Moïse* (1974) に始まって、サンダー・L・ギルマンの『フロイト・人種・ジェンダー』*Freud, Race, and Gender* (1993) が続き、なかでもフロイトのモーゼ論研究としてはヨゼフ・ハイム・イェルシャルミの『フロイトのモーゼ論』*Freud's Moses: Judaism terminable and interminable* (1991) 以降、ヤン・アスマンの『エジプト人モーゼ』*Moses der Ägypter. Entzifferung einer Gedächtnisspur* (1998)、ジャック・デリダの『アーカイヴの病——フロイトの印象』*Mal d'archive—une impression freudienne* (1995)、そしてエドワード・W・サイードの『フロイトと非ヨーロッパ人』*Freud and the non-European* (2003)、同じくアスマンの『モーゼの分断』*Die Mosaische Unterscheidung: oder, der Preis des Monotheismus* (2003) が続く<sup>5</sup>。

より広い思想史の枠ではポール・リクールの『フロイトを読む——解釈学試論』*De l'interprétation. Essai sur Sigmund Freud* (1965) があり、さらに近年になって、アルフレッド・タウバーの『フロイト——嫌々ながらの哲学者』*Freud. The reluctant Philosopher* (2010)、モリス・フォルマンの『カントに対抗するフロイト?』*Freud gegen Kant?* (2010) などの研究書が相次いで出版された。このように、フロイト研究は衰えを見せず、しかも多岐にわたる。

デュフレーヌは自著『〈死の欲動〉と現代思想』*Tales from the Freudian Crypt: the Death Drive in Text and Context* (2000) を、「死の欲動理論の系譜をたどった最初の研究書」であ

3 この流れについては [中村 (2013a)] を参照されたい。

4 こうした再評価の流れについては別に論じた [中村 (2011)] のでそちらを参照されたい。

5 この流れについては [中村 (2015)] を参照されたい。

り、出版時点において「いまだに唯一の」研究書であると自負する [Dufresne: 4]<sup>6</sup>。デュフレヌは、「大陸系思想家にあって、アーネスト・ジョーンズの伝記以降に始まったフロイト批評（批判）に関心を抱いたほとんど唯一の人」として、ミケル・ボルク＝ヤコブセンの名を挙げる [Dufresne: 3] が、そのボルク＝ヤコブセンは、デュフレヌの書に寄せた序文の中でフロイトの姿勢を「科学者のものでも、哲学者のものですらない」と攻撃している。本稿は、このボルク＝ヤコブセンの言葉に触発されて、学的態度とは何かという観点からフロイトの学問的方法を確認しようとするものである。

### 精神分析に礎を提供した諸科学

精神分析の理論は当時の脳解剖学、神経病理学、生理学、生物学の知見を礎としている。しかしいずれの学問もそれぞれの時代的制約を受けている。物理学の分野であれ生物学の分野であれ、いずれの科学理論も、やがて更新され、より説明力のある仮説に取って代わられる。それが、科学の進歩に外ならない。フロイト自身がどう主張しようとも、当初より精神分析は「科学ではない」という批判を浴び続けてきた。精神分析が「科学ではない」ならば、その基盤にある科学的知見が「時代遅れ」となったとき、フロイトの思想は逆に、なお何かを語りうるものとして残るだろうか。

精神分析以前に出版された最初の著作『失語症の理解にむけて』*Zur Auffassung der Aphasien* (1891) (以下、『失語論』と略記) はいまだフロイト全集に収録されたことはなく、1992年によやくフィッシャー出版社から新書版として再版されたが<sup>7</sup>、ヴォルフガング・ロイシュナーはその「緒言」で言う、この『失語論』は「フロイトの神経病理学者としての能力を、ひいてはまた自然科学者としての資質を大いに証明するもの」であり、「自然科学者たちが精神分析に対して示すあからさまな蔑視に対する反論になりうる」と [Leuschner: 8]。ロイシュナーは、「とりわけこの仕事 [『失語論』] においては、精神分析は時代遅れの生理学的仮定を含んでいるために、新しい生理学的知見に応じて修正すべきである」 [Leuschner: 8f.] という意見を紹介している。つまり、フロイトが参照したいくつかの科学的知見が時代遅れになったからといって、フロイトの思想全体が丸ごと否定されてしまうのではなく、フロイトもまた「時代の制約」から自由ではありえなかったことを示すにすぎない。そしてその思想自体

6 ただし皆無なのではない。拙著『「妻殺し」の夢を見る夫たち——ドイツ・ロマン派から辿る〈死の欲動〉の生態学』、拙論「ポエジーの成立」、ならびに拙論 *Die Ethologie des „Affekts“—Von Spinoza bis Freud* はいずれも〈死の欲動〉理論の思想史的系譜を辿ろうとする試みの一環である。

7 60年代後半から70年代にかけて、パウル・フォーゲルは精神分析以前のフロイトの著作を4巻本で出版する準備をしていたが、その仕事を完成させる前に亡くなった。この仕事はインゲボルク・マイヤー＝パルメドに引き継がれ、1992年に『失語論』だけがフィッシャーから出版された。

は、該当個所の修正というマイナーチェンジによって、なお「すくわれる」<sup>8</sup>部分があることになる。

ウィリアム・W・ジョンストンは、ウィーンという都市にあってこそフロイトはフロイトたりえたのだとする [Johnston (1972): 245/365]。何となれば、「フロイトの無意識という概念をはじめそのほかの基本的な着想の多くは、ハーブスブルク帝国の官僚政治の仕組みや国民の反応など、そこで毎日のように見られた現象を土台にしている」からである [Johnston (1972): 246/366]<sup>9</sup>。さらにジョンストンは、当時のウィーン文化とウィーン大学医学部を「治療ニヒリズム」Therapeutischer Nihilismusという言葉でもって特徴づける。オットー・ヴァイニンガーやカール・クラウス、ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインなどがその体现者であり、「社会や言葉の病気は、もともと治療できない」という考えである [Johnston (1972): 230/338]。しかし元来この言葉は、一九世紀初頭のウィーン大学医学部で徐々に形成された考え方を指す [Johnston (1972): 230/339]。自然が病気を治してくれるまで加療せず待つという、「いわゆる待機療法」eine sogenannte abwartende Therapieが一八世紀末にはウィーン総合病院の基本方針となった。それは、偏見や迷信による過った「治療」を排し、人間のもつ自然の治癒力が存分に発揮されることを目的とするものであり、この流れは、解剖学者であり外科医であるカール・フォン・ロキタンスキの時代に頂点を迎えた。ロキタンスキの病理解剖を元に近代診断学が整えられ、打診法が普及し、解剖の技法が完成された。

これらの医学者はみな実証的医学の使徒であった。経験に基づく真理を追い求め、前世紀末の時代思想から生まれたロマン主義医学を倒そうとした。[Johnston (1972): 232/341]

しかしまた、こうした「革新」的な治療法はやがて、もっぱら正確な診断のみを重視する、知識偏重で治療放棄の人命軽視へととなりはてていった。

8 科学では「現象をすくう」という言い方がある。たとえば、「反实在論は、できるだけ多くの観察可能な真理を帰結するような理論を構成して「現象を救う」ことが科学の目的であると考えている」というふうに [戸田山 (2005): 161]。

9 「神経症患者の数がハーブスブルク帝国でとくに他の国より多かったわけではないだろう。ただ、ハーブスブルク帝国には何よりも神経症の仕組みの発見に都合のよい条件が揃っていた」としてジョンストンは、官僚政治の仕組み、ブルジョア家庭における性道徳観念、検閲のため所々削除されて印刷された新聞の空白をめぐる人々のさまざまな憶測などを挙げて説明している [Johnston (1972): 246/366ff.]。しかしながら、だからこそまた、『ヒステリー研究』にみられるような患者はウィーンという都市に特徴的なものであり、普遍化できないという批判を当初より受けていた。ピーター・ゲイは、「彼 [フロイト] の人間観は、せいぜい、世紀の転換期におけるウィーンの人びとという純粋に局地的な一タイプの転写にすぎないのではあるまいか」[Gay (1985): 20/16f.] という疑問に対して、フロイトの患者は、中流階級のユダヤ人女性に限定されないこと、ドイツ語ではなくむしろ英語で治療を行うことが多かったことなどを挙げて反証としている [Gay (1985): 95f./99f.]。

フロイトも例に洩れない。かれは治療ニヒリズムの洗礼を受けて出発してのち、次に、精神医学の分野でも根強かった治療ニヒリズムを敵に回して長年闘った。しかし、後年、生の衝動に対する死の衝動というものを唱えるに至って、最初の出発点に戻ってきた。自然はある不可解な理由から、一部の人間を死に運命づけており、このような者の場合、医者がいかなる手段を尽くしても無駄である、というのがかれの最終的な見解であった。  
[Johnston (1972): 236/348]

「死の衝動（死の欲動）」を「一部の人間」に限ってみられる特異な現象と捉え、そうした人を治療不可能な病に罹ったかのように語るジョンストンは、明らかに死の欲動理論を誤解している。しかし彼が提示した治療ニヒリズムという観点は、当時の医療現場におけるフロイトの立ち位置を伝えてくれる。ジョンストンによれば、たった一人の患者相手に延べ数百時間もかけて話を聞いた「アンナ・O」の治療には「新しい芽」が含まれていた。このときプロイアーの治療者としての態度は、「無介入の観察者という立場」というべきものであり、この点においてプロイアーは「マッハやブリュッケと同じ実証主義と治療ニヒリズムの精神を実践した」のだといえる<sup>10</sup>。一方で、プロイアーが患者の感情や気持ちに深い関心を払って治療に当たったということは、実質的には「治療ニヒリズムからの脱却」を意味しており、こうした「新しい芽」がフロイトに受け継がれたのだと言える [Johnston (1972): 243f/360f.]。ピーター・ゲイは『ヒステリー研究』におけるフロイトの態度を、「生産的受動性」と表現している [Gay (1985): 85/88]。しかしながら、だからといって死の欲動理論が、治療はおよそ無駄であることを意味したという捉え方を受け入れることはできない。

ロキタンスキがウィーン大学医学部の治療ニヒリズムを体現していたのは、病理解剖という分野の特質にも負うところがあったかも知れない。しかしその背後には、世界は本来調和的なものだという、ライブニッツのそれにも似た世界観があった。

かれによれば、動物の生命活動の本体をなす原形質 (Protoplasma) は、下等動物でも高等動物でもすべて、食物を求めることを基本としている。したがって、その競争相手を排除しようとして攻撃的になる。人間も例外でなく、やはり、原形質に宿る攻撃性のために、嘘をつき、相手を欺き、時と場合により矛盾する態度と行動を使い分ける。これは、人間生来の欠点で、これを何とか抑制できるのは、国家だけである。個々人は、自由を求めてダーウィンの生存競争をするように運命づけられており、この闘いが科学に進歩をもたらすと同時にまた多くの苦しみも生む。つまり、人生に苦しみはつきものだが、これ

<sup>10</sup> 「談話療法 (talking cure)」を行うプロイアーの態度を「無介入の観察者という立場」と表現するジョンストンの捉え方には、プロイアーの時代よりもずっとのちに誕生した量子力学の影響が見られる。つまり、ジョンストン自身が己の同時代の思想に条件づけられていると言える。

を克服するのは、人間がお互いにもつ同情心によってである……。[Johnston (1972): 232/341f.]<sup>11</sup>

ライプニッツやホッブスのみならず、ダーウィンの影響が色濃いという点で、ロキタンスキの思想もまた彼が生きた時代の思潮の証言となっている。一九世紀、あらゆる動物の生命活動の本体として、「原形質（プロトプラズマ）」なるものが存在すると信じられていたことがあった。

原形質は一種の自然哲学的エーテルである。エーテルがこの世にあるすべての物質構造に浸透し、電磁波の伝播の媒体として作用すると考えられていたのと同じように、生きている物質である原形質は他の点では生気のない構造に浸透し、それらに生命性を与えると考えられた。[P. B. Medawar/J. S. Medawar (1983): 308]

ロマン派の自然哲学の名残でもあるエーテル仮説は、一九世紀から二〇世紀初頭にかけて信じられていたが、今日では否定されている。しかし、エーテルの存在自体は否定されても、エーテル仮説は電磁波説と大枠では似ており、エーテル仮説のすべての部分が間違っていたとまでは言えない。だからこそ、電磁波説が現れるまではかなり有力な説明力を持った仮説として受け入れられていたのである<sup>12</sup>。同様に、医学研究では前時代的な考えを排したロキタンスキにおいても、その人間観はライプニッツやホッブス以来の思想を受け継いでいたのであり、こうしたある種の時代錯誤<sup>アナクロニズム</sup>——異なる時代の思想が混淆するという意味において——は、一人ロキタンスキにのみ起こった現象ではないだろう。「原形質」という術語が歴史的用語となってしまったあとでも、ひとつの概念として継承されてゆく例を、のちに我々はフロイトに見ることになる<sup>13</sup>。

## 何が問題となっているのか

### 「ナルシシズムの導入にむけて」(1914)

1990年代初頭、いわゆる「フロイト戦争」が起こり、これを機にフロイト研究は大きく様変わりした。「精神分析の理論、実践、効能に関するもっとも根本的な諸問題につきこれまで

11 ジョNSTONによるロキタンスキ『動物的生命の相互連帯』*Die Solidarität alles Thierlebens* (1869) の概略。

12 戸田山和久は、エーテル仮説を修正しようとする試みについても紹介している [戸田山 (2005): 84]。

13 「原形質」の歴史的文脈については、越智和弘「ドイツ文学講義 ヴィレム・フルッサー概論——脱肉体化時代の官能的思索——」(名古屋大学文学研究科2015年度開講)により示唆をえた。この示唆に富む啓発的な授業に対してこの場を借りてお礼を申し上げたい。

以上に積極的に再考してみよう」という動きの中で、デュフレヌの本は書かれた。その本に寄せた序の中でボルク＝ヤコブセンは、「科学的な主張との矛盾を論証」という仕方では精神分析を批評することにはならないとする<sup>14</sup>。何となれば、「精神分析が心理学的科学であったためしなど絶えてなく、ただメタ心理学的な幻想であっただけ」だからである。

たしかにフロイトはしばしば自身のメタ心理学的理論は臨床的な「観察」を土台にした単なる「思弁的上部構造」[[みづからを語る] \*Selbstdarstellung\* (1925)] にすぎず、臨床的データが求めるのなら「それを取り替えて放棄しても損害はない」[[ナルシズムの導入にむけて]] などと実証的な口調で主張をしてはいる。しかしこれは聞こえがよいだけの冗談である<sup>15</sup>。

ボルク＝ヤコブセンがフロイトやその思想を語る口調は、「批判的」という以上に攻撃的である。フロイトの「実証主義的な口調」がなぜ「聞こえがよいだけの冗談」にすぎないのかを、ボルク＝ヤコブセンは説明しない。そのためにまずフロイトのこの言葉がどのような文脈で言われたのかを確認しよう。「ナルシズムの導入にむけて」Zur Einführung des Narzißmus (1914) で上記の言葉が言われるのは、リビード理論の中で、二つの心的エネルギー、即ち「自己保存欲動のエネルギー」と「性欲動のエネルギー (=リビード)」の区別を論じている箇所においてである。

当の諸関係についての思弁的な理論を打ち出すのであれば、なによりもまず、くっきりとした輪郭をもった概念をその基礎として獲得することが望ましいだろう。ところが、私の考えでは、そこがまさに思弁的理論と経験の解釈の上に築かれた科学との違いである。この後者は、滑らかで論理的に申し分のない基礎づけをもつという思弁の特権を羨んだりせず、霧のように消えてゆきそうな、ほとんど表象不能な基本的想念にすすんで甘んじるだろう。科学はこれらの想念を、それが発展してゆく過程でより明確に捉えようと望むだろうし、場合によってはそれを他の想念と交換することもいとわない。[Freud (1914): 142/122]

フロイトの方法は、「思弁的理論」eine spekulative Theorie と「経験の解釈の上に築かれた科学」eine auf Deutung der Empirie gebaute Wissenschaft との違いを梃子とする。前者は概念を基礎とするものであり、そこから論理的に綻びのない理論を展開してゆくためには、まず概念自体が明瞭に定義されなくてはならない。それに対して科学は、経験から出発し、経験の

<sup>14</sup> ボルク＝ヤコブセン「ミケル・ボルク＝ヤコブセンによる序文」、13頁。

<sup>15</sup> ボルク＝ヤコブセン「ミケル・ボルク＝ヤコブセンによる序文」、13頁。

解釈に基づいて築かれるものであり、その解釈の仕方には他の可能性もあるかも知れないが、その可能性にしても経験自体から導き出されるものである。経験は、解読され分析（解析）され解釈されることを待っている。解釈が施される以前の、いわば生の経験<sup>なま</sup>に対しては、さしあたって「霧のように消えてゆきそうな、ほとんど表象不可能な」想念しかもてないが、いかに漠然としていようと、それが足がかりとなる。それをより明瞭にしてゆく作業は、一気にすべてを解き明かすことはなく、徐々に、説明可能な部分を広げてゆくことになるだろう<sup>16</sup>。そのプロセスが展開してはじめて、出発点にあった想念がいくらか明瞭になるにすぎない。観念はあくまでも思考の展開の結果として得られるものなのである。フロイトは、これとは逆の立場、つまり論理的にほころびのない理論の構築を目指し、そのためにまず概念が明瞭であることを必須とする立場を、「思弁的理論」と位置づける。そうした「思弁的理論」と科学理論は、出発点と目標が真逆なのである。

フロイトが「思弁的理論」として念頭に置いていたのは、具体的には、リビードを心的エネルギー一般として一元化しようとするユングのリビード理論である。ユングの捉え方であれば、確かにリビードという概念ははっきりとした輪郭をもつであろうし、こうした明確な概念を基礎として理論を打ち出すことを優先する場合には、望ましいこととされるだろう。しかしそれは、フロイトからすれば、すべての人間は同系であると主張することと同様に、リビード概念そのものの解体を意味する<sup>17</sup>。

というのも、これらの観念は、いっさいがその上に拠って立つような科学の基礎ではないからだ。そのような基礎をなすものは、むしろ観察をおいてほかにない。これらの観念は、建造物全体の最下部をなすのではなく最上部をなすのであって、取り替えられたり撤去されたりしてもならん損害はない。われわれは今日でもなお物理学でそうしたことを体験しており、物質、力の中心、引力その他についての物理学の基本的な見方は、精神分析においてそれに匹敵する概念と比べてさほど信用度が高いというわけではないのである。

[Freud (1914): 142/122]

<sup>16</sup> フロイトの夢分析では、説明不可能な部分、文脈に不相応な部分に注目し、なぜそうなっているのかを問うところから始まる。

<sup>17</sup> 「ナルシズムの導入にむけて」と同年に発表された「精神分析運動の歴史のために」でもフロイトは、同様の反論を述べている。また、「性理論のための三篇」のうち第三篇第三節「リビード理論」（この節は1915年版で加筆された）においても、リビードを心的な欲動のエネルギーそのものと考え、リビードという概念自体を解体することであり、それは、これまで精神分析の観察によって獲得されたすべての成果を放棄することになると述べている [Freud (1905): 120/279f.]。

フロイトの同時代、まさに物理学は激変の時代だった。エルンスト・マッハ (1838-1916)<sup>18</sup> によるニュートン力学批判、形而上的な要素を排除した「現象学的物理学」の提唱などが一つの潮流を創り出し、その流れの中にアインシュタインの特殊相対性理論がある。そしてヴェイトゲンシュタインの思想の影響とも相俟って1929年には数学者や科学哲学者を中心とした研究サークル「ウィーン学団」が結成された ([Johnston (1972): 278-297])。彼らが展開した論理実証主義運動は、科学的実在論論争を引き起こし、そもそも科学とは何か、科学理論とは何か、科学の目的とは何であるかという問題を提起した [戸田山 (2015): 21f.]。

科学の目的は、論理的にはほころびのない理論を構成する点にあるのではない。より多くの経験(現象)を説明することであり、現象は、無限に多様で複層的なものでもあるために、すべてが説明され尽くした事態というものとは想定されえない。フロイトにとって、性欲動と自我欲動の区別は、精神分析がもたらした成果 [Freud (1905): 120/280] であり、観察を積み上げて構築された建物の上部構造である。ユングが主張する心的エネルギーへの一元化は、フロイトによれば、この上部構造のさらに上に積み上げられるものであるよりはむしろ、この土台を瓦解させるものでしかない。

### 「みづからを語る」(1925)

フロイトの思考は、同時代のウィーン文化のなかで練り上げられ洗練された。「形而上学的な要素」を排そうとした論理実証主義のように、「思弁的理論」になることを回避しようとしたフロイトであったが、経験の解釈がより正確なものであるためには、身体とところのメカニズムに関するモデルの構築が必然となる。そのために、メタレベルの思考が必然となる。「リビード理論を進めてゆくためには、当面、思弁という方法に頼らざるをえない」 [Freud (1905): 119f./279]<sup>19</sup> ように、ある段階で、そこから先へ進むための方途として、「思弁」が必須となることがあるのである。

無意識の存在を認めた精神分析は、さらにすすんでそれを前意識と本来的な無意識とに区分することになったが、その経緯を手短かに説明するのは、なかなかむずかしい。理論は経験の直接の表現であるが、状況というものは直接観察の対象にはなりえない。そして仮説は、素材を使いこなすという目的に適うようになっていて、さまざまな状況に関与する。こうした仮説でもって理論を補うのは、合法であるように思われる。精神分析以前の諸科学でも、まさにこうした手法がとられてきた。 [Freud (1925): 57f./92]

<sup>18</sup> マッハはオーストリアの物理学者、科学哲学者。私講師時代フェヒナーの精神物理学を教えていた。1895年、ウィーン大学に新設された「帰納科学の歴史と理論」講座に招聘され、1901年まで就任。ヨーゼフ・ポッパー＝リュンコイスとは生涯の友だった [Johnston (1972): 191/278f.]。

<sup>19</sup> 「性理論のための三篇」の「リビード理論」中の、註17で参照した個所の直前で述べられた言葉。

科学は、観察（経験）の解釈の上に築かれることに変わりはないが、しかし科学の射程は、直接観察の対象になりうるものだけに限定されてしまうのではなく、科学は、直接観察の対象にはなりえないものまでも解明しようと努める。経験に基づき、類推を介して、未知のもの、未経験のものに対する予測を可能にする帰納法はその目的に優れた思考法である。人間の思考が〈真実〉へと到達しうるのかどうか、そもそもそのような〈真実〉がそれ自体としてあるのかどうかをどのように捉えるにせよ、仮説は、より確かな〈真実〉へと近づくための梯子なのである。梯子の高さまで上り詰めたなら、いずれその梯子は別の梯子に取り替えられるように、最初の足がかりとなった仮説も、修正され放棄されることにもなる。思考が展開する過程において、推論がより明瞭になり、より確からしさを増すならば、これを別の考えと交換することも辞さないというのは「合法」であり、論理的な一貫性をもった態度であり、正当といわれてよい。

戸田山は科学哲学史の立場から、一時成功したが後に否定されたさまざまな科学理論を考察する際、「理論の意味論的なコミットメントと科学者の認識論的なコミットメントを区別すること」<sup>20</sup>の重要性を説く [戸田山 (2015): 118]。

観察証拠は理論的言明にもサポートを与えるが、かといって、理論全体に等しくサポートを与えるとまで言う必要はない。科学者は、理論の部分部分に異なる態度を取り、異なる度合いで信じていることができる。理論的存在のあるものについては存在を強く確信し、あるものは疑いつつ許容するということがありうる。このようにして、科学者は理論のそれぞれの要素に異なる度合いでコミットメントすることができるし、怪しげな対象を措定して、怪しげだと思いながらも、それを発見法として使って新しい予言を出したり、新しい実験を組み立てたりすることができる。[戸田山 (2015): 119]

こうした立場は、エーテル仮説の修正をなお試みようとする科学者たちの根拠であり、ロイシュナーが紹介するフロイト理論の更新可能性を説く者たちの根拠にもなりうる。フロイトが参照した生物学的知見の更新に応じて、それに該当する部分を修正することによって、理論を生きながらえさせることができるかもしれない。もしもその修正によって、理論の根幹が覆されてまったく別の主張になってしまうのでないならば<sup>21</sup>。しかしまた、更新された科学的知見自体がやがてはさらに更新されて、いずれ「時代遅れ」のものとなってゆくのであろうけれども。

<sup>20</sup> この「コミットメント」という言葉を戸田山は、「態度選択」という意味において用いている [戸田山 (2015): 6]。

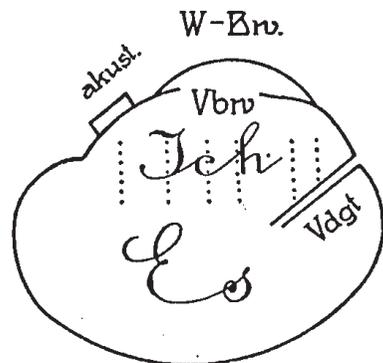
<sup>21</sup> 理論の部分的修正というとき、理論のどの部分が変わらず保持されて、どの部分が修正を迫られるかによって、修正後の理論が、大枠ではやはり元の理論の修正版と言えるのか、あるいはまったく別の理論になってしまうのかについては重々考えられねばならないと、戸田山は指摘している [戸田山 (2015): 246]。

無意識にさらに区分を与えることは、心という装置がいくつかの審級もしくは系からなっているという発想と結びついている。これらのあいだの関係は、空間的表現を用いて語られるが、だからといって、じっさいの脳の解剖とのあいだにつながりを求めるわけではない（それをおこなうのはいわゆる局所論の立場だ）。こうした表象、あるいはまた同様の表象は、精神分析の思弁的な上部構造に含まれている。上部構造はどの個所であれ、もしなにか不備が立証されたならば、ただちに放棄もしくは交換されてかまわない。それで瑕疵が生じるわけではないし、遺憾であるとも思われない。より観察に即して、報告しなければならぬものは、まだまだたくさんあるからだ。[Freud (1925): 58/92f.]

ここが、ボルク＝ヤコブセンが挙げた「思弁的上部構造」という言葉を述べた個所である。上記でフロイトが述べる「空間的表現」は、フロイトが構想した「メタ心理学」のうち「精神作用のトポグラフィー」に該当する。これは、解剖学的な機能の特定という局所論とは完全に区別されるものである。戸田山によれば、これまで「科学理論」はもっぱら「文の集まり」として、公理系としてモデル化された。しかし、「理論」は必ずしも文の形においてのみ表現されるのではない。そして文法的（統語論的）な「真か偽か」という指標のみが、現実に近づいた度合いを測るわけでもない。

理論の意味論的捉え方においては、理論は表象ではなく表象されるべきモデルになるから、理論は何通りものさまざまな仕方で表象できることになる。ここで重要なのは、それぞれの表象の仕方のどれ一つとして、それだけで理論のすべてを完全に表象し尽くしていると考える必要はないということだ。図、グラフ、文、方程式は、それぞれ部分的に不完全に理論を表象していると考えてもよいだろう。[戸田山 (2005): 237]

神経病理学時代の論文にはフロイトが描いた神経細胞の絵や図などが掲載されている。『心理学草案』*Entwurf einer Psychologie* (1895) では、ヴィルヘルム・フリースの影響もあって、フロイトは心理過程を量や数式で記述しようと試みており [Johnston (1972): 244/362]、意識の層構造などの図も挿入されている。フロイトのこうした試みは、「自然科学は量のみを認めるが、我々の意識は質のみを提供するという考え」に基づいて、神経構造を「外的な〈量〉を質に変換する [verwandeln] 装置」として捉えようとする中で生まれた [Freud (1895): 401/20]。これ以後、量や数式など自然科学に倣った記



自我と無意識とエスとの相関図  
『自我とエス』より。

述方法は見られなくなるが、『自我とエス』Das Ich und Es (1923) に描かれた自我と無意識とエスの構図は、まるでマイネルトが描写した脳のようなものである。

『失語論』でフロイトが引用した箇所 [Freud (1891): 88/59] でマイネルトは、「原形質」という言葉を使っているが [Meynert (1884): 127f.] [中村 (2011): 130f., 314f.]、ロキタンスキと決定的に違うのは、おそらくロキタンスキは原形質を言葉どおりに捉えてその存在を信じていたのに対し、マイネルトはこれで以て前脳皮質を喩えている点である。動物の生命活動の一番基本的な、原初的な原形質は、神経細胞が最高度に発展した形である皮質とは、ちょうど進化の発端と先端として真逆の関係にある。このことは、脳解剖学者であれば熟知した上での比喩である。ロキタンスキ以後、いわゆる「脳神話学」が発達し、マイネルトの脳解剖学は中心的な役割を果たした。フロイトの『失語論』はまさにこうしたマイネルトの「皮質中心主義」を批判したのだったが、興味深いのは、このうちフロイトは、他のいくつかの術語と同様、「原形質」という比喩を踏襲してゆく点である。「心理学草案」に始まって、「ナルシズムの導入にむけて」、『精神分析入門講義』*Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1917) や「精神分析のある難しさ」*Eine Schwierigkeit der Psychoanalyse* (1917)、そして『精神分析概説』*Abriß der Psychoanalyse* (1938)<sup>22</sup>にもこの比喩を見出すことができる。マイネルトが原形質で以て、皮質から縦横無尽に伸びる神経細胞を喩えたように、「心理学草案」ではニューロンの神経興奮を伝導する媒体を「原形質」という言葉で表現する。受けとった刺激を放出する装置として神経系を説明するために「慣性の原理」が参照され [Freud (1895): 388f./6]、刺激興奮の授受というこうした二方向の伝導のプロセス自体が、原形質の分化を促し、それによって伝導能力の発達を促すと [Freud (1895): 391/8]。この時点ではまだマイネルトから借りた術語の応用にすぎない。しかし「ナルシズムの導入にむけて」以降は一貫して、リビードの備給を説明するためにこの比喩を用いるようになる——「備給」という言葉もマイネルトが用いた術語の転用である——。「貯蔵槽」である自我から発する自我リビードが、あるときには対象にむけられて対象リビードとなり、また回収されて自我リビードに戻りもするということを、突起を延ばしたり引っ込めたりする単一の原形質から成る単純な生物に喩えるのである [Freud (1914): 141] [Freud (1917a): 431/499, 436/505] [Freud (1917b): 6/48] [Freud (1938): 73/185]<sup>23</sup>。

〈死の欲動理論〉の出現は、第一次世界大戦の勃発や近親者の死によってフロイトが厭世的になったためと説明されることが多いが、上記のような、刺激興奮の授受によって分化を促された「原形質」というイメージは、あらゆる生物は原初の状態へと回帰することを目指すという〈死の欲動〉理論の基本的考えに繋がるものである。それはまた『快原理の彼岸』において想定される「最大限単純化された」「生きた有機体」の原イメージでもある。こうした「思弁」

<sup>22</sup> これは1938年に執筆されたが、手術のため中断し、執筆の継続が放棄された。初出は1940年。

<sup>23</sup> 「貯蔵槽」という比喩については『自我とエス』の編註(12)に詳しい。『フロイト全集』第18巻、352頁以下。

によって我々は「意識の出現」[Freud (1920): 26/78] を説明することができるだろう、とフロイトは言う。その論理的展開の先に、「欲動とは、より以前の状態を再興しようとする、生命ある有機体に内属する衝動である」[Freud (1920): 38/90] という洞察がある。原形質に喩えられた「自我の貯蔵槽」にせよ、この欲動にせよ、「慣性の原理」の発現であり、「有機的生命における慣性の表れ」[Freud (1920): 38/90] なのである。かくの如く「原形質」に由来するフロイトの自我と無意識とエスのトポグラフィは、比喩とか理解補助のためのアクセサリーという以上に、フロイトの理論、とりわけ〈死の欲動〉理論をすぐれて「表象」していると言えるだろう。

### ウィーン対ドイツ (ベルリン) ?

最後にボルク＝ヤコブセンが挙げるのが、『モーセと一神教』*Der Mann Moses und die monotheistische Religion* (1939) における「ラマルクの結論」である。ボルク＝ヤコブセンが挙げるのが以下の個所である。

たしかに、私の立場は、後天的に獲得された性質の子孫への遺伝に関して何も知ろうとはしない [1] 生物学の現在の見解によって、通用しにくくなっている。しかしそれにもかかわらず、生物学の発展は後天的に獲得されたものの遺伝という要因を無視しては起こりえないという見解を、私は控えめに考えても認めざるをえない。[Freud (1939): 100]  
[[ ] 内はボルク＝ヤコブセンによる]

ボルク＝ヤコブセンは、ジョーンズがこの「ラマルクの結論」の削除をフロイトに要求したときのフロイトの態度に言及するが、フロイトがどう対応したのかを具体的には述べない。代わりに上記の個所を挙げて、このような態度は「科学者のものでも、哲学者のものですらない。それはナルシスト的梦想家、『自我閣下様 His Majesty the Ego』の態度」と評したのである。

これまで我々が記してきた「批判」のほとんど全てのものは二つの断定に還元することができ、それが極めて権威主義的な流儀で絶えずくり返されたのである。つまりフロイトの解釈は恣意的な作り物であり、また彼の結論は人を反発させるものであるから、虚偽にちがいない、というのである。[Jones: 389/306]

ジョーンズは、1910年ころまでにフロイトと精神分析に向けられた批判を以上のように概括するが、ジョーンズやフロイトからすれば、精神分析が「科学ではない」とか「客観的ではない」と攻撃する人たち自身の主張が「客観的」であったことはなかった。それは、「彼ら [論

敵たち] が精神分析を拒んだという事実、またその拒絶の頑なさ」を指してのことではない。そうした事実は、少なくとも論敵たちの「汚点」にはならない。

それにたいして、そのいちじるしい傲岸さや良心のかけらもない論理軽視、論駁のさいの下品さや悪趣味ぶりには、弁解の余地はない。[……] あのあと数年たって世界大戦になったとき、敵国からはドイツ国民は野蛮人だという非難の大合唱がおこった。こうした非難は、ここまで述べてきたこととぴったり重なり合っている。[Freud (1925): 75f./111]

今からちょうど百年ほど前にフロイトの論敵たちが示した「著しい傲岸さや良心のかけらもない論理軽視、論駁のさいの下品さや悪趣味ぶり」を、現代の論敵たちが免れているわけでもない。そうなると、ボルク＝ヤコブセンの攻撃的なコメントは、百年前からくりかえされてきた「非難の大合唱」にまた一つ和音が加わったにすぎないことになる。当時、精神分析といわず、そもそもウィーン学団自体が、ベルリンの科学者から猛烈な攻撃を受けていた。その背景には、「ゲルマン科学」ないし「ドイツ科学」とよばれる民族主義的科学運動があった。物理学という学問領域における反ユダヤ主義であり、アインシュタイン、シュレーディンガーなどユダヤ系物理学者が多く関係していた「理論物理学の革命」に対抗する実験物理学の標榜である [戸田山 (2015): 53f.]。

グリーンバーグは、言語学者ヘルマン・パウルの動的な「有機体」というモデルとフロイトの「言語装置」を比較する中で両者の共通点を以下のように述べている。

パウルとフロイトのあいだの記述の一致はさらに広がる。それは「科学的態度」とよばれるかもしれないものを含む。例えば、言語関係の無限の複雑さは、最終的な説明が不可能なことをつましく認めることを必要とするというパウルの認識を含む。これは、言語現象に対する、失語症の本のなかのフロイトの態度でもある。[Greenberg: 71/107]

「無意識」を受け入れるという点においてフロイトは、当時の実験心理学者ヴィルヘルム・ヴントよりも、言語学者ヘルマン・パウルや文献学者デルブリュック<sup>24</sup>にはるかに近いとグリーンバーグは指摘するが、ヴントが体系化した『民族心理学』 *Völkerpsychologie* (1900-20) に

24 ベルトルト・デルブリュック (1842-1922) はフロイトの『失語論』で参照される「唯一の言語学者・文献学者」であり [Greenberg (1997): 51f./77]、錯誤の分析に際参照されている。グリーンバーグは「科学的な態度」の一例としてデルブリュックから以下の言葉を引用している。「我々が日々我々自身に関して、また他の人々に関して観察できることは、取るに足らないことであるという不利な点があるかもしれないが、誰によっても検証されうるという利点がある」 [Delbrück: 92]。つまり、人類の先祖がどんな言葉を話したかという抽象的で検証不可能なテーゼよりも、「誰によっても検証されうる」という点を重視して日常語の観察を重視した点である [Greenberg (1997): 57/86]。

対して、フロイトは随所で——特には『トーテムとタブー』において——反論を加えていることからこのことは確認できるのである。

## 批判と反論

ジョーンズの伝記が伝えるところによれば、フロイトは神経病学者時代、一六、七世紀の文学を読み耽っていたことがあった。

フロイトは、悪魔がその崇拜者に行う性的倒錯行為が自分の患者が語る子供のころの物語と一致する事実にとくに驚き、こういう倒錯は古代ユダヤの半ば宗教的な性的儀式から伝えられた名残であるという示唆を提出した。フロイトが生涯固執したラマルク学説を早くも抱いていたことが、このところから理解される。[Jones: 296/232]

フロイトをして、個々の患者の極めて私的な物語と、歴史の中で繰り返されてきた儀式という、異なるレベルにあるもの同士の間「一致」を見出させるのは、類比という方法である。ジョーンズは、このような一致を見出すフロイトの姿勢に、「ラマルク的な考え」を認めたが、あるいはここで、ユダヤの共同体とユダヤ固有の記憶の継承方法という観点からフロイトのモーセ論を論じたイェルシャルミに倣って、「集合的記憶」論への手がかりをつかむこともできるかもしれない。しかしそれによって、フロイトが成し遂げた洞察の数々をユダヤに特殊なものに限定してしまうことに対しては慎重になるべきであろう。何より、父たちの経験の記憶の継承という問題については、同じく重要なオイディプス・コンプレックスを参照すべきだろう。ゲイは、歴史学の側の「誤読」の一例として、真面目に受けとめるならば、オイディプス・コンプレックスは「歴史学を破壊するであろう」というページ・スミスの言葉を引く。

なぜならば、「歴史記述とは本質的に父親たちの知恵を息子たちに伝えようとする努力であり、このゆえに、それは世代間の連続性を破壊するよりは維持しようとする努力だからである。」[Gay (1985): 112/118]

もしも「父殺し」が人類に埋め込まれたプログラムであるとするならば、歴史は、父たちの経験の記憶の継承に対する絶えざる「拒絶の過程」となってしまうとスミスが考えたのに対し、ゲイは、オイディプス経験は子供の心に「禁忌と良心の呵責」を生じさせることを通して、外ならぬ父たちの知恵を伝えるのであり、スミスの憂いとはまさに逆の働きをしているのだと反論する [Gay (1985): 112/118]。

ボルク＝ヤコブセンは、フロイトの態度を「科学者のものでも、哲学者のものでさえない」

と論じたが、それに対して、例えばロベールのように反論できるかもしれない。

精神分析をして、先ず諸々の科学、宗教、哲学が昔からそれぞれ自らの領域から排斥せざるを得なかったものについて考察せしめ、次に他の学問分野が無視し無意味と見做したもののこそ、肝心かなめなものであると考えさせることになったところの、その無意識に関する理論のゆえに、精神分析は他でもない自らの上にその学的基礎を築いていること、自らその法則となり、その真実を測る物差しとなることの権利を主張できるのである。[Robert (1974): 127/224]

生物学の領域でこそ、ラマルク説はある時点において否定されたが、そもそも精神分析という領野は他の学問が、論駁されてもはや無意味だと見なして排除したものを考察することを旨とするのであるから、「時代遅れの仮説」を依然として支持しているという批判は当たらない。批判と反論とのこうした構造は、無意識と意識の関係に似ている。意識は無意識について「知らない」といい、「知ろうともしない [何も知らないでいることを欲する] nichts wissen will」。かくして無意識は、意識からは抑圧され排除されたものがやがて浮上するまでの場を提供するのだが、ちょうどそのように、精神分析は、いったん否定された仮説が修正されやがて復権するまでの場を提供することを請け負うものなのかもしれない<sup>25</sup>。そこで浮上するのは、部分的な修正を受けて変更された理論は、どこまで元と同じ理論であると言えるのか、もしかしたらそれはもはや単なる修正版ではなく、別の理論に入れ替わってしまうことにならないかという問題である [戸田山 (2015): 246]。

彼 [フロイト] は、「生物科学の現在の姿勢が、獲得された性質の子孫への遺伝について、何も聞き入れようとしないこと [nichts wissen will]」をはっきりと認識しており、承認している。そして彼が直後に、生物の進化を参照せずに済ますことは彼には困難であると認めるにしても（だが誰がそのことで彼を、原理に基づいて、絶対的に、何の名において、本気で非難できるだろうか）、彼はこの点に関して、しばしば言われる以上に慎重で用心深い態度を示しており、獲得された性質（「それは捉え難い」と「外的印象に結びついた記憶痕跡」の間には、特に区別を設けている。これらの形質と痕跡は（フロイトはもちろんここでそれを、この形で言うことはないであろうが）、大いに込み入った、言語学

25 実際、後天的な獲得形質が遺伝するという説は、近年になって見直されている。マウスの実験で、恐怖の条件付けをされたメスから生まれた子は、母親と隔離された状態におかれても臭いに対して反応したという。これを以て「恐怖体験やトラウマが子世代に遺伝する」という主張がなされた。Intergenerational transmission of emotional trauma through amygdala-dependent mother-to-infant transfer of specific fear. (<http://www.pnas.org/content/early/2014/07/23/1316740111>) あるいは、Fears can be inherited through smell. (<http://www.theverge.com/2014/7/28/5944797/fears-can-be-inherited-through-smell>)

的・文化的で、一般に暗号化可能で暗号化された、超世代的・超個人的な中継に沿って、科学としては確立されていないアーカイヴをそのように通過しながら、確かに進みうるであろう。このことは必ずしも、われわれをラマルクやダーウィンに連れ戻すわけではない、たとえそれによってあらゆる象徴的・個人的アーカイヴについての遺伝的なプログラムと暗号化の歴史を、別の仕方ですべなければならないにしても。フロイトが述べているのは、超世代的な記憶またはアーカイヴの二つの類型（先祖の経験の記憶といわゆる生物学的獲得形質）の間に、我々が類比 [Analogie] を感じ取りやすく、「一方を抜きで他方を表象する (vorstellen) こと」ができないということのみである。[Derrida (1995): 62/54]

デリダは、アーカイヴという概念そのものを定義し直すことで反論する。フロイトの時代の生物学が自説を承認しないことをフロイトは重々承知している。その自説は、ラマルク仮説の発想を取り入れたものではあっても、ラマルク仮説のままではもはやない。ラマルクの発想を受け継いだからといって、我々は、ダーウィンやラマルクが提示した一九世紀の問題設定やその時代的制約へと引き戻されることにはならないのだ。デリダは、批判の多いラマルク的な考えである「獲得形質」を「つまるところ、生物学的アーカイヴ das biologische Archiv」と表現し直すことによっても反論しているのだ [Derrida (1995): 62/53]。

ここで、ある分野で構築されたモデルが別の分野には応用できないからといって、そのモデルが否定されることにはならないという主張も付け加えることができるだろう。メカニズムのモデルの構築は必ず抽象化と理想化の操作を経ている。現実の現象からいくつかの重要なポイントだけを抽出してモデル化する抽象化と、現実には満たすことの不可能な条件を設定してその状況下で起こる現象のメカニズムをさぐる理想化である。こうして構築されたモデルと現実とは類比関係にあり、抽出されたポイント以外では必ず齟齬を来す。現実には、それらのポイントだけで構成されるものではなく、またつねに雑多な偶然性に満ちた状態にあるからである。しかしそのことでこのモデルが間違っていると非難されることはない。理論は、現実（戸田山の言葉を借りるならば「実在システム」）に対して「嘘をつく」ものなのである [戸田山 (2015): 264f.]。そのように、個別の分野で構築されたモデルは限定的で、ある意味ローカルなものなのであって、それを別の分野、例えば物理学理論に還元できるかという問題設定は意味をなさない [戸田山 (2015): 269f.]。要は、焦点化されたポイントにおける類比、という点で、限りなく現実（「実在システム」）に近いことがそのモデルの意義を決めるということである。

ロバールは、1927年にフロイトがビンズヴァンガーに宛てた手紙の一節を紹介する。曰く、「私は常に建物の一階か地下に居続けてきた」と。宗教については、「人類神経症 [Menschheitsneurose] というカテゴリーにぶつかって以来」、自分の低い小さな家に住む場所を見つけたと [Robert (1974): 131f./233]。フロイト最後の著作モーセ論は精神分析理論の集

大成であり、宗教論としても、上記に言う「自分の小さな家」という建築物の完成形態であるはずだった。しかしその第一部の序言でフロイトは、モーセがエジプト人であるということが歴史的には実証されえないがために、「どんな愚か者でもひっくり返してしまえるような壊れやすい土台の上に据えなくてはならなかった」<sup>26</sup>と述べる。あるいは第二部のはじめでは以下のようにも言う。

心理学的に獲得された洞察が意義深いものであればあるほど、それをより確実な根拠づけのないまま外部からの批判的攻撃に曝してしまうことへの警戒心はますます強くなる。これは粘土の土台の上に青銅の像を置く愚に等しい [……]。[Freud (1939): 114/16]

フロイトはこれまで再三、自分の理論は観察証拠という揺るぎない土台に築かれていると述べてきた。その上部構造がいかなる仮説に取り替えられることが起こりうるにせよ、土台自体は揺るぎないと。その建築物の最後の段階を飾るモーセ像が、「粘土の土台の上に青銅の像をおく愚」と言われるのはなぜだろう？<sup>27</sup> アスマンは、ここにおいてフロイトは、学問的実証性を離れた領野に踏み出すのだと述べる [Assmann (2010): 183]。この点で、モーセ論のフロイトの立脚点は、『失語論』におけるフロイトのそれとは好対照をなす。一八世紀の言語起源論争に加わった思想家たちが、言語の起源を説明するために、何千年も昔の祖先の状態を想定するところから出発したのに対し、『失語論』でフロイトがモデルとしたヘルマン・パウルやデルブリュックは日常的に観察可能で、誰によっても検証されうる経験を重視したのだった。そして今やフロイトが、同じく何千年も昔に起こった一件の殺人事件を一つの民族の起源として設定する。これは一体、「科学的態度」からの後退だろうか？

サイドはモーセ論という仕事を前にしたフロイトの躊躇を、ベートーヴェンのそれに比している。

私が明らかにしたいと願っていることは、ベートーヴェンやフロイトの場合、晩期作品が送り届けるその知的な軌跡が妥協を知らないある種の怒りに充ちた侵犯性に衝き動かされており、あたかも作者が、人生の最後にふさわしい調和のとれた平静さに落ち着くことを期待されながらも、困難にも、むしろあらゆる種類のあらたな考え方と挑発に毛を逆立てて突進することを選択したかのように見えるのはなぜか、という点の解明です。[Said (2003): 36/39]

モーセ論を書き続けること、のみならず公表することは、キリスト教会の徹底的な敵意をあお

<sup>26</sup> 1934年の12月16日付のアーノルド・ツヴァイク宛ての書簡より [引用は Assmann (2010): 187による]。

<sup>27</sup> 「粘土の土台の上に青銅の像を置く」とは、「砂上の楼閣を築く」という意味の慣用語である。

ることを意味した。ナチスドイツの時代、ヨーロッパ全体に反ユダヤ主義の嵐が吹き荒れている時点では、それまで批判の矛先となっていたキリスト教会は、その人道主義のゆえにユダヤ人にとって、また精神分析家たちにとって貴重な庇護主となってしまった。外的な政治的情勢はもちろん非常に逼迫したものであったが、しかしモーセ論という仕事を前にしたフロイトの逡巡は、既に充分に大仕事を成し遂げてきた者の晩年には不似合いに思われる。

またもやジョーンズによれば、1917年当時、フロイトは、フェレンツィと共同で行っていた「ラマルキズムの精神分析に対する関係の研究」を以下のように要約してアブラハムに書き送ったという。

我々が意図しているのは、ラマルクを完全に我々の基盤の上におくことであり、器官を創造し変形するところの、ラマルクのいわゆる「必要」は、ヒステリーにその痕跡の見られる如き肉体に対する無意識的思考の力に外ならないことを示すことです。要するに「思考の万能」を示すわけです。そうなれば目的と有用性は精神分析的に説明されるでしょう。それは精神分析学の完成となるでしょう。[フロイトがアブラハムに送った要約] [Jones: 442/349]

ここで言われる「思考の万能」は、『トーテムとタブー』以来、フロイトの鍵語となっていたものである。未開人と子供との間の類似性からフロイトは、人類史の展開のモデルを構築することができると考えていた。「思考の万能」は、器官を創造し変形する「必要」に呼応してその要請を実現する。こうしたことが現象として生じることを、ヒステリーという症状が証言する。フロイトが膨大な患者の談話から抽出したヒステリー発生のメカニズムは、「思考の万能」という鍵語の元にモデル化される。それは、すべての前提となる事実ではなく、数知れぬ観察証言に対する解釈の上に構築された建物の最上部を飾るものとなる。それもまた、他にもっと強力な説明力を持つ仮説が現れた時点で取り替えられるものにすぎなかったかもしれない。「精神分析学の完成」というそのことが、ラマルク仮説の発想を十分に咀嚼して取り入れることを意味していたのであれば、モーセ論を前にしたフロイトの逡巡は、この完成とそれによって意味される一つの終息を予感してのものだったのではないだろうか。こののち、フロイトにはもはや、それ以上に取り替えられるべき新しい仮説を知る時間はないだろう。その理論には、依然として随所に修正されるべき部分が混在していたにしても、それが修正されたところで、精神分析理論の根幹は、揺るぎないものであるだろう。その理論は、精神分析という名を返上することにはならないだろう。

「思考の万能」は、世代を超えて器官を創造し変形させる。系統発生的に、超世代的に伝達される記憶の継承と同時に、記憶の継承に対する反逆というプログラムもまた抱え込んで、精神分析は、継承され断絶され潜伏するというダイナミズムの中で、己が理論を反復し続けるだ

ろう。そのようにして精神分析は、「科学ではない」という批判を繰り返し浴びせられつつ生き延びるのである。

本論は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽）「精神性の進歩に関する自然発生的説明の検証——フロイトのモーセ論が示す推論装置の射程」（研究代表者：中村靖子）ならびに、科学研究費補助金（基盤(B)）「認識の成立・知の探求・社会生活・幸福のための記憶の役割と可能性に関する学際的研究」（研究代表者：金山弥平）の成果の一部です。

## 文献

名前のすぐあとにオリジナルの初版の出版年を記す。翻訳のあるものについては翻訳を参照し、引用個所のあとに原著の頁と翻訳書の該当ページを記したが、原語に応じて訳を改めた個所もある。原著を入手できなかったものについては、翻訳の頁のみを記した。（以下に原著と邦訳が挙がっているが、引用個所では頁数が一つしかないものがこれに該当する。）

- Assmann, Jan (1997): *Moses der Ägypter. Entzifferung einer Gedächtnisspur*. Frankfurt am Main 6. Auflage, 2007. (この書は最初1997年に英語で発表され、翌年ドイツ語版が出版された。)
- (2003): *Die Mosaische Unterscheidung: oder, der Preis des Monotheismus*. München.
- (2010): Nachwort. In: *Der Mann Moses und die monotheistische Religion*, herausgegeben von Jan Assmann, Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18721, Stuttgart 2010, S. 175–216.
- Delbrück, Berthold (1887): Amnestische Aphasie. In: *Sitzungsberichte der Jenaischen Gesellschaft für Medicin und Naturwissenschaft für das Jahr 1886. Supplement zur Zeitschrift für Naturwissenschaft, Bd. 20*, Jena 1887, S. 91–98.
- Derrida, Jacques (1995): Dem Archiv verschrieben — Eine Freudsche Impression. Berlin 1997. (『アーカイヴの病。フロイトの印象』 福本修訳、法政大学出版局 2010年。)
- Dufresne, Todd (2000): Tales from the Freudian crypt. *Tha Death Drive in Text and Context*. Stanford University Press California 2000. (『死の欲動』と現代思想』 遠藤不比人訳、みすず書房 2010年。)
- Ellenberger, Henri F. (1970): *Die Entdeckung des Unbewußten. Geschichte und Entwicklung der dynamischen Psychiatrie von den Anfängen bis zu Janet, Freud, Adler und Jung*. Aus dem Amerikanischen von Gudrun Theusner-Stampa, Zürich 2005 [Original: 1970]. (『無意識の発見——力動精神医学発達史』 木村敏・中井久夫監訳、弘文堂 1980年。)
- Fullinwider, S. P. (1991): Darwin Faces Kant—A Study in Nineteenth-Century Physiology. In: *The British Journal for the History of Science*, Vol. 24, No. 1 (Mar., 1991), pp. 21–44.
- Freud, Sigmund (1891): *Zur Auffassung der Aphasien. Eine Kritische Studie*. Herausgegeben von Paul Vogel, bearbeitet von Ingeborg Meyer-Palmedo, Einleitung von Wolfgang Leuschner, Frankfurt am Main 1992. (『失語症の理解にむけて』 中村靖子訳、『フロイト全集』 第1巻、岩波書店 2009年、1–127頁。)
- (1895): *Entwurf einer Psychologie* (1950 [1895]). In: *Gesammelte Werke chronologisch geordnet*. Nachtragsband, Fischer Taschenbuch Verlag Frankfurt am Main 1999, S. 373–486. (『心理学草案』 総田純次訳、上掲『フロイト全集』 第3巻、2010年、1–105頁。)
- (1905): Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. In: a.a.O., V, S. 27–145. (『性理論のための三篇』 渡邊俊之訳、上掲『フロイト全集』 第6巻、2009年、163–310頁。)
- (1913): *Totem und Tabu. Einige Übereinstimmungen im Seelenleben der Wilden und der Neurotiker*. In: a.a.O., 1999, IX. (『トーテムとタブー』 門脇健訳、上掲『フロイト全集』 第12巻、2009年、1–206頁。)
- (1914): Zur Einführung des Narzißmus. In: a.a.O., X, S. 137–170. (『ナルシズムの導入にむけて』 立木康

- 介訳、上掲『フロイト全集』第13巻、2010年、115-151頁。)
- (1917a): Eine Schwierigkeit der Psychoanalyse. In: a.a.O., XII, S. 1-12. (『精神分析のある難しさ』家高洋訳、上掲『フロイト全集』第16巻、2010年、45-55頁。)
- (1917b): *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. In: a.a.O., XI. (『精神分析入門講義』高田珠樹／新宮一成／須藤訓任／道簾泰三訳、上掲『フロイト全集』第15巻、2012年。)
- (1920): *Jenseits des Lustprinzips*. In: a.a.O., XIII, S. 1-69. (『快原理の彼岸』須藤訓任訳、上掲『フロイト全集』第17巻、2006年、53-125頁。)
- (1923): Das Ich und das Es. In: a.a.O., XIII, S. 235-289. (『自我とエス』道簾泰三訳、上掲『フロイト全集』第18巻、2007年、1-62頁。)
- (1925): »Selbstdarstellung«. In: a.a.O., XIV, S. 31-96. (『みずからを語る』家高洋／三谷研爾訳、上掲『フロイト全集』第18巻、2007年、63-140頁。)
- (1938): Abriß der Psychoanalyse. In: a.a.O., XVII, S. 63-138. (『精神分析概説』津田均訳、上掲『フロイト全集』第22巻、2007年、175-250頁。)
- (1939): *Der Mann Moses und die monotheistische Religion*. In: a.a.O., XVI, S. 101-246. (『モーセという男と一神教』渡辺哲夫訳、上掲『フロイト全集』第22巻、2007年、1-73頁。)
- Gay, Peter (1985): *Freud für Historiker*. Aus dem Amerikanischen von Monika Noll übersetzt. Tübingen 1994. (『歴史学と精神分析——フロイトの方法的有効性』成田篤彦／森泉弘次訳、岩波書店 1995年。)
- Gilman, Sander L. (1993): *Freud, Race, and Gender*. Princeton University Press 1993. (『フロイト・人種・ジェンダー』鈴木淑美訳、青土社 1997年。)
- Johnston, William M. (1972): *Österreichische Kultur- und Geistesgeschichte. Gesellschaft und Ideen im Donauraum 1848 bis 1938*. Aus dem Amerikanischen übertragen von Otto Grohma. I. deutschsprachige Auflage 1974. (『ウィーン精神 I』井上修一・岩切正介・林部圭一訳、みすず書房 1986年。)
- Jones, Ernest: *The Life and Work of Sigmund Freud*, first published in three volumes by Hogarth Press 1953, this abridged version first published in the USA by Basic Books 1961. (『フロイトの生涯』竹友安彦・藤井治彦訳、紀伊國屋書店 1964年。)
- Leuschner, Wolfgang: Einleitung. In: Freud: *Zur Auffassung der Aphasien*, Frankfurt am Main 1992, S. 7-31.
- Medawar, P. B./Medawar, J. S. (1983): *Aristotle to Zoos. A Philosophical Dictionary of Biology*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1983. (『アリストテレスから動物園まで——生物学の哲学講義』長野敬・鈴木伝次・田中美子訳、みすず書房 1993年。)
- Meynert, Theodor (1884): *Psychiatrie. Klinik der Erkrankungen des Vorderhirns begründet auf dessen Bau, Leistungen und Ernährung*. Erste Hälfte (Bogen 1-18). Wien 1884.
- Robert, Marthe (1974): Sigmund Freud zwischen Moses und Ödipus: die jüdischen Wurzeln der Psychoanalyse. Übers. von Hans Krieger, Frankfurt am Main Berlin Wien 1977. (『エディプスからモーゼへ——フロイトのユダヤ人意識』東宏治訳、人文書院 1977年。)
- Said, Edward W. (2003): *Freud und das Nichteuropäische*. Mit einer Einführung von Christopher Bollas und einer Replik von Jacqueline Rose. Deutsch von Miriam Mandelkowitz, Zürich 2004. (『フロイトと非ヨーロッパ人』長原豊訳、平凡社 2003年。)
- Sulloway, Frank J.: *Freud, Biologist of the Mind. Beyond the psychoanalytic Legend*. London 1979.
- Yerushalmi, Yosef H. (1991): *Freuds Moses. Endliches und unendliches Judentum*, aus dem Amerikanischen von Wolfgang Heuß, Frankfurt am Main 1999. (『フロイトのモーセ 終わりのあるユダヤ教と終わりのないユダヤ教』小森謙一郎訳、岩波書店 2014年。)
- 立木康介『精神分析の名著——フロイトから土井健郎まで』、中公新書 2012年。
- 戸田山和久『科学的事実論を擁護する』、名古屋大学出版会 2015年。
- 『科学哲学の冒険——サイエンスの目的と方法をさぐる』、NHK ブックス 2005年。
- 中村靖子「フロイトのモーセ論——物語と虚構」、中村靖子編『虚構の形而上学——あることとないことのないで』、春風社 2015年、179-217頁。
- 「ポエジーの成立」、『思想』No. 1068、岩波書店 2013年、97-124頁。[中村 (2013a)]

- 『「妻殺し」の夢を見る夫たち——ドイツ・ロマン派から辿る〈死の欲動〉の生態学』、松籟社 2013年。  
[中村 (2013b)]
- Yasuko Nakamura (2013): Die Ethologie des “Affekts” — Von Spinoza bis Freud, *Journal of the School of Letters* 9, 2013, S. 33-45. [中村 (2013c)]
- 『フロイトという症例——「我々の本質の核」もしくはいかなる受動性にもまして受動的な内なるものをめぐる言説の系譜——』、松籟社 2011年。

キーワード：死の欲動、フロイト、精神分析、論理実証主義、科学的事実論、アーカイヴ、集合的記憶

**Abstract**

Die Freudsche Methode. Zwischen Beobachtung und Spekulation

Yasuko Nakamura

Von den unzähligen immer wieder auftauchenden Einwänden gegen die Psychoanalyse ist die häufigste, dass sie auf der Lamarckschen Konzeption beruhe, obwohl diese doch schon widerlegt worden sei. Gelegentlich wurde auch verlangt, die Psychoanalyse gemäß den modernen wissenschaftlichen Erkenntnissen zu revidieren. Für Freud kann das Fundament der Wissenschaft allein die Beobachtung sein, hingegen sind Begriffe nur „das Oberste des ganzen Baues und können ohne Schaden ersetzt und abgetragen werden.“ Um von der empirischen Basis der Beobachtungen zu den Relationen weiterzuschreiten, die nie Gegenstand unmittelbarer Beobachtung werden können, braucht man Hypothesen. Freud schrieb 1927 in der Zusammenfassung seiner gemeinsamen Forschungen mit Ferenczi, ihr Versuch ziele darauf ab, mit ihren Beobachtungen Lamarcks Theorie eine Grundlage zu verschaffen. Das werde die Vollendung der Psychoanalyse sein. Allgemein gesagt, müssen Theorien den aktuellen wissenschaftlichen Befunden immer wieder angepasst werden. Zum Beispiel umschreibt Derrida die erworbenen Eigenschaften als „biologisches Archiv“ und sagt, die Zustimmung dazu führe keineswegs auf die Lamarckschen oder Darwinschen Schemata zurück. Wichtig ist also zu sehen, ob die erneuerte Theorie noch dieselbe sei oder ob es sich nicht nunmehr um eine ganz andere handele. Die Psychoanalyse kann nicht umhin, zwischen den privatesten Geschichten der einzelnen und den allgemeinen der Menschheit — oder zwischen zwei Typen des Gedächtnisses bzw. des „transgenerationalen Archivs“, nämlich zwischen dem Gedächtnis der Väter und den erworbenen biologischen Eigenschaften — Analogien festzustellen und so die Tragweite des Begriffs „Vererbung“ zu erweitern.

Keyword: Todestrieb (the Death Drive), Freud, Psychoanalyse, logical Realism, Scientific Realism, Archiv, collective memory